

”世界で最高に美しく、シルクを染め上げる技術“とも言える京友禅。その制作工程は十五から二十もあり、それぞれを受け持つ職人がいます。彼らはそのひとつの工程だけに四十年、五十年という時間をかけるのです。そんな職人の仕事を通して、奥深い京友禅の世界へご案内します。

悉皆屋というのは京友禅におけるプロデューサーであり、市内各所に散らばる職人達をネットワークして反物を染め上げていく役割を担っています。そもそも「友禅染め」自体は京都以外にも存在します。もしかすると皆さんも東京（江戸）友禅や加賀友禅という言葉を目にしたことがあるかも知れません。どこの産地にも悉皆屋という言葉は存在しますが、京都は悉皆屋という言葉に「京友禅プロデューサー」の意味合いが強い地域です。他産地でもプロデューサーを指すことはありますが、どちらかと言えば「シミ落としや洗いなどを担う職業」を悉皆屋と呼ぶ傾向にあります。

職人文化と作家文化

各産地と比較して京友禅の特徴をお伝えするならば「職人文化（分業制）」ということが挙げられます。東京、加賀はどちらかといえば「作家文化」が特徴です。私見ながら、友禅染めにおける作家とは「作家名（＝作風）」と「可能な限りの工房一貫製作」が一つの定義だと考えます。無名主義の職人は依頼主である悉皆屋のために仕事をするので、悉皆屋が変われば仕上がりも全く異なるのも面白いところです。販売現場において作家の商品は作家名が重要ですが、京友禅においては作り手である職人の名前よりも、老舗問屋や呉服店のネームバリューを重視する傾向があると思います。京都では「誰が作ったか」よりも「何処が売っているか」に価値を置いていっていると言っても過言ではないでしょう。しかしながら、実際はどの職人が作ったかということが何よりも大切で、その証拠に上等な悉皆屋はお抱えの職人を「街中の路地奥深くに囲っておきたい」、そんな空気感が京都の悉皆業界には漂っています。

地入れ

地入れと聞いて、その作業を説明できる人は呉服屋にもほとんどいないでしょう。なぜならば、完成した商品には全く



痕跡が残らず、何のためにその作業が行われるのかも認知されていないからです。

職人は晴天の日に作業を行うのですが、理由は湿度です。雨の日に地入れをする、糊糸目が溶け過ぎてしまったり太くなるからです。これを「うどんのようになる」というのは悉皆業界用語でしょう。糊糸目は細い仕上りを良しとするので、この作業は自然の湿度管理ができる土間で行われるのが理想的です。私がお願しているのは中京区の地入れ職人さんで、反物13メートルを張れる土間の仕事場で作業をされています。

京友禅 職人模様

呉服屋兼悉皆屋原巨樹がご案内する

其の式

糊置きを終えた反物は、厳密にはまだ生地の上に糊糸目が乗っているだけの状態です。生地にも当然厚みがありますから、このまま染めると生地の中を通って染料が柄の外に浸み出してしまいます。そこで地入れ職人は、豆汁（豆乳にフノリを混ぜた液体）を刷毛に浸し、生地に引きます。これにより豆汁が糊糸目を少し溶かして生地に食い込ませてくれるので、染料の浸み出しを防げます。また豆汁により、続く染めの発色が良くなる効果もあります。この地入れ、上物を扱う

挿し友禅

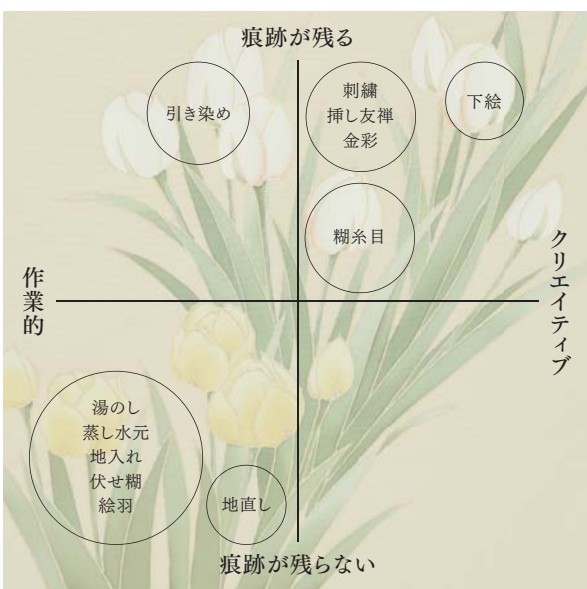
挿し友禅とは、糊糸目で描いた柄の中を染めて行く、イメージとしては塗り絵に近い工程です。悉皆屋や職人は、挿し友禅のことを単に「友禅」と言ったりもします。それだけ代表的な工程だと言えるでしょう。モチ米の糊糸目を用いる場合、高い防染力によって、深く濃い色を挿すことができます。ただし、ゴムの場合と異なり、着物全体の地色が染まっていらない状態で挿すので、地色を想像しながら染



めなければならぬ難しさがあります。友禅技術という点では、葉っぱや花びらなどにグラデーションを付ける「ぼかし染め」が注目して頂きたいポイントです。そして、何よりも重要なのが「色出し」です。実際、染料を調合して必要な色を作る下準備には、手間も時間も大いに掛かるものです。そもそも友禅職人がどんな染料を持っているかということが色出しには決定的で、適切な染料を持っていないければ、何日間、染料を混ぜ続けても目指す色に到達することはできません。薄い色が単なる浅くて軽い色になる染料もあれば、薄くても深みと味わいのある色になる染料もあるので、ベテラン職人が誰でもそのような染料を使っているわけではなく、そういう仕事を長年目指し続けた人だけが出せる色だと言えるでしょう。私の頼む嵯峨の職人も、やはり良い染料を持ち、高い技術で染めてくれています。挿し友禅は痕跡が商品にしっかりと残り、染め上がりの上品さに大きく影響を与える重要な工程ですが、その責任の70〜80%は悉皆屋にあると考えます。全ては悉皆屋のディレクションによって決まり、全ての色について適切な指示を出せるかどうか勝負だからです。挿し友禅において、とりわけ大事な色は「朱、利休（緑系）、ねず（グレー）」です。これらが定まれば、商品の仕上がりは安定してきます。

痕跡が残る仕事と残らない仕事

京友禅の職人という一括りに捉えられがちですが、各工程の職人に求められる資質は大きく異なります。グラフにある「痕跡が残る」とは、商品になった時に消費者を魅了する色やデザインを作り出しているというものであり、「痕跡が残らない」とは、職人の仕事ぶりが全く見えないことで腕が良いとされるものです。「クリエイティブ」な職人は創作力と共に、悉皆屋がどんな商品を目指しているのかということを読み取るコミュニケーション力と提案力も重要な資質です。「作業的」な職人にとっては器用さや段取りの良さがより重要になってきます。作業をこなすリズム感を大切にすると、職業だと言っても良いでしょう。若者が「職人になりたい」と言う時には、大抵クリエイティブ系の職人を指しますが、友禅染め全ての工程が本場に重要なものばかりです。また若手職人の適性を見ても、作業系が向いている場合もよくあります。こうした職人を目指す若者達のためにも、職人模様の発信に努めたいと思います。



©原巨樹（はらなおき）
「京ごふく二十八（ふたや）」代表。海上自衛隊で海外を回中、各国の人達が自国文化を自慢気になっている様子を見たことがきっかけになり、着物を購入し始める。その後、全国の着物産地を回ってみると、着物の小売価格が極めて高いことに対し、職人の収入が驚くほど少ないことが自らの人生の課題となって、呉服屋になることを決意。中間流通を省いた受注生産で、京友禅の製造販売を行っている。